

## 捕虜たちの声なき声に耳を傾けて(5) 2018

英連邦墓地はいつも深い緑と静寂に包まれています。整然と並ぶ 1800 余りの墓碑の 1 つ 1 つに様々な生と死のドラマが秘められています。私たちは、遠い異国で無念の死を遂げた捕虜たちの声なき声を聴き取ろうと長年調査をしてきました。今回はその中から 3 つの話をご紹介します。

(2018.8.4 POW 研究会 田村佳子&笹本妙子)

### ■カナダ区 A7 ロット B 列 12 Murray Goodenough 1943 年 12 月 22 日死亡 18 歳

横浜の英連邦軍戦死者墓地に眠る兵士の大半は 20 代であることにお気づきでしょう。彼らの両親、婚約者、新婚の妻や幼い子供達はその悲しい知らせをどのように受け止めたのでしょうか。この墓地に眠る一番若い兵士は一体誰でしょうか。カナダ区に行くと彼のお墓を見つけることが出来ます。年齢 18 歳でした。

1941 年 11 月 16 日、香港を防衛する英国軍支援の為、1975 名のカナダ兵が到着しました。彼らはジャマイカで基礎訓練、後は香港へ向かう船上で受けたのみの急ごしらえで未熟な部隊、戦場経験は皆無、装備も不完全なものでした。マレーもその一員で当時 16 歳、激しい襲撃に直に立ち向かうこととなりました。

12 月 7 日、日本が真珠湾を攻撃、カナダ兵たちは程なく進撃して来た日本軍に対峙。彼らは充分訓練され、既に戦場経験が有り、しかも完全装備のつわもの達でした。聖なるクリスマスイブは凄まじい戦闘となり、翌クリスマスの日以降、264 名の兵士願戦死、生存者は全員日本軍の捕虜となりました。

1943 年 1 月 19 日、英国兵を含む約 660 名のカナダ兵が香港を出発、龍田丸にて 3 日後、日本に到着、マレー達 500 名のカナダ兵が東京第 3 捕虜収容所に送られました。横浜鶴見造船所での使役で、マレーにとって終焉の地となりました。カタル性肺炎でした。

生還し、この墓地を訪ねた元捕虜達はよくマレーの勇敢さを口にしました。香港陥落時の戦闘での彼の精悍さが称えられ、専攻十字章（兵士としての最高の名誉の勲章）を授与されました。マレーが入隊したのは 1939 年 10 月、僅か 14 歳という事実に胸が詰まります。

マレーの死の悲しみはあまりにも大きく、家族は以後口をつぐみ、後の世代には彼の話がほとんど伝わっていません。香港のスタンリーにある聖ステファン・カレッジの資料館に彼の遺品が箱に納められ、展示されています。



マレーの勲功を讃える勲章や表彰状など

### ■納骨堂： パネル 3 Edgar Harold 1943 年 2 月 12 日死亡 45 歳

エドガー・ハロルドは息子であり、夫、父、また 2 人の祖父でもありました。1897 年イギリスに生まれ、1943 年日本で亡くなりました。1939 年、42 歳にして英国砲兵隊員に配属されました。既に二人の

娘を病気で失い、更に当時 21 歳の娘が出産で瀕死状態にあり、彼自身の 7 番目の息子が生まれたばかりの時のことでした。

基礎訓練を受けた後、彼の連隊は装備し、東部からスコットランドに移動し、船団を仕立てた軍艦に乗り込み、イラクのバスラに向け出発しました。

南アのダーバンに到着する頃、日本が真珠湾を攻撃したとのニュースが入りました。1941 年 12 月 21 日、部隊は編成しなおされ、エドガーはシンガポール防衛に向かう 4 隻の軍艦と 2 隻の護衛艦から成る船団に加わりました。武器や必要な物資はバスラに行っていました。エドガーの部隊はシンガポールからジャワの精油所の防衛に向かうことになりました。劣勢化する戦闘に降参が示唆され、英国兵たちは満員列車に乗ってジャカルタに行き、そこからタンジョンプリオクまで行進、1942 年 3 月 8 日日本軍に降伏しました。



戦地に赴くエドガー

捕虜となって 7 カ月後の 10 月、千人超(記録では 2700 名)の捕虜達がぎらつく太陽の下、5 キロ程をよるめきながら歩き、吉田丸に詰め込まれました。船内の環境は、食事を含め、極めて悪く、3 日後の 10 月 26 日シンガポールに到着しました。次に「しんがぼー丸」に乗り込む前に、赤痢・コレラの検査が有りましたが、その結果を待たずして 10 月 30 日、日本に向けて出航しました。ゴキブリやネズミが住み着く不潔な船で、捕虜達の入られた船倉は身動き出来ないほど混み合い、食事は乏しく、病人には薬もありませんでした。乗せられた 1081 名の捕虜の内、台湾を経由し 11 月 25 日、ようやく日本に到着した折、船外に出られたのは 677 名のみでした。航行中に、また到着時の死亡者が多数ある中、エドガーは門司の検疫所に連れて行かれた 35 名のうちの一人でした。

彼はそこで 1943 年 2 月 12 日に亡くなり、火葬され、遺骨は門司の大雄寺の共同墓地に埋葬され、戦後横浜の英連邦軍戦死者墓地に移送され、納骨堂に英・蘭・米の 334 名の捕虜達と共に眠っています。

今日に至るまでエドガーの家族は誰ひとり横浜に墓参する機会に恵まれないでいます。エドガーの一番下の息子は今年 79 歳になります。父親の記憶は皆無ですが、皆様が父親について小文を読んで下さることを大変に喜んでおります。

———エドガーの孫、マリリンより (訳、田村)

訳者注：昨年末、初めて連絡を頂いたこのエドガーの家族によると、年配者が兵士になることは稀なケースでは無く、ご夫人は 7 人の子供を抱えて留守を守り、行方不明の報にも夫の無事帰還を願い続け、死亡通知を受けたのは、戦後でした。が、その後も大変気丈に暮らされたそうです。

## ■ 戦後区 A フロット A 列 12 Anthony John Hatfield 1948 年 1 月 28 日死亡 生後 1 日

インド・パキスタン区の上にある戦後区に足を踏み入れたことはありますか？ ここには第 2 次大戦後に亡くなった人々や朝鮮戦争の戦死者が埋葬されていますが、生後 1 日とか 1 週間といった幼子までいます。この子たちはなぜここに眠ることになったのでしょうか？ その謎の 1 つが解けたのは 2012 年 10 月、日本外務省の招聘で来日したオーストラリアの元捕虜・抑留者の方々がこの墓地を訪れた時のことでした。その 1 人、元抑留者のエルサ・ハットフィールドさんの息子さんが眠っていたのです。

エルサさんは 1923 年に上海で生まれ育ちましたが、18 歳になった 1941 年 12 月、家族と離れてオー

オーストラリアに帰国途中、太平洋戦争が勃発し、フィリピンに抑留されました。抑留生活は苦難の連続で、栄養不足のため多くの人が脚気、疥癬、潰瘍などに苦しみ、死亡者が続出しました。食べ物を求めて抑留所から脱走した男性は即座に銃殺され、エルサさんは日本人に対して激しい敵意を抱きました。しかし 1945 年 2 月、米軍の奪還作戦によって抑留所が解放され、エルサさんは無事オーストラリアに帰ることができました。

戦後、エルサさんはオーストラリア陸軍に入隊し、英連邦占領軍の一員として日本に派遣されました。駐留中に会ったオーストラリア軍人と結婚して広島県の呉に住み、親切的日本人とも知り合い、幸せな生活でしたが、一方で広島原爆の惨禍を目の当たりにし、日本人々も苦しんでいることを知りました。やがて身籠り、母になることを楽しみにしていましたが、生まれた息子アンソニー君は 10 時間しか生きることができませんでした。彼は四国の墓地に埋葬されましたが、その後横浜の墓地に移されていたことが今回の招聘によってわかりました。彼女は息子の墓碑に、夫・娘・孫娘と撮った写真を手向け「今は日本人に対して敵意は抱いていません。皆さんは素晴らしい国を築きました。日本がずっと平和で幸せでありますように」と語りました。



若い息子の墓を訪ねるエルサさん

※捕虜に関する情報は、POW 研究会 HP をご覧下さい。<http://www.powresearch.jp/jp/index.html>